避難生活 悩む女性

トイレ、着替え プライバシーなく

西日本豪雨で大きな被害が出ている岡山県内では、倉敷市真備町地区の住民を中心に、14日現在も約2900人が避難生活を送っている。長い人で9日目を迎え、被災者の疲れもピークに達する中、女性への対応が課題としてクローズアップされている。トイレや着替え、防犯面に子育てといった「女性ならでは」の悩みを抱え、男女が一緒に過ごす空間に不安を感じる人も多い。プライバシー確保など女性の視点を取り入れた避難所運営が急がれる。

「小学生の娘が2人いる。私を含め、何とかプライベート空間がほしい」。岡田小（同町岡田）に避難するフィリピン人の英語教員ペレイラ・チャリトさん(41)＝同所＝は訴える。

多くの人が「雑魚寝」で過ごす体育館。間仕切りはなく、チャリトさんは娘と毛布にくるまったり、狭い車を使ったりして着替える。異性の目を気にして暑い中でも肌を露出しないよう長袖、長ズボンで過ごすようにもしているという。

同市内の避難所では間仕切りでプライベート空間を確保する動きが出始めているが、避難生活を送る女性は安心・安全面でも不自由な生活を強いられる。例えば、トイレが男女別に分かれていない▽下着などを干す場所がない▽子どもを気軽に遊ばせるスペースがない―などだ。

避難所で過ごす女性や子どもたち。女性ならではの悩みを抱えながら不安な生活を送っている＝14日、倉敷市真備町地区

介護職の女性(48)＝同町箭田＝は「生理用品や下着をみんなの前で受け取るのは恥ずかしい。せめて女性だけの場所にしてほしい」と語気を強め、第五福田小（同市水島西千鳥町）では保育士東叔美さん(39)＝同市真備町尾崎＝が「環境が変わったせいか、2歳の長女が夜泣きする。周囲に迷惑を掛けられないので外に出るが、その分寝る時間はほとんどない」と話す。

ただ実際には、多くの女性が「大変なのはみんな同じ」と、困っていてもなかなか言い出しづらい現状がある。国際医療ボランティアAMDA（岡山市）グループの菅波茂代表は「避難所の運営は男性が中心になりがち。運営側は女性の視点に立った改善が欠かせない」とアドバイスする。